

神大法曹会の人々

司法試験合格から弁護士としての生活まで

和田 幸子

(弁護士 本法律研究科終了)

第1 司法修習生としての生活

1 司法試験合格から修習先赴任まで

平成22年の新司法試験に合格してから、それまでののんびりゆったりした時間の流れが、あっという間にめまぐるしく変わりました。

ロースクール時代は、忙しいとは言っても研究室の机に向かい、ずっと勉強するという生活でした。しかし、司法試験に合格すると、司法修習生の採用申請（合格発表後1週間で全ての種類をそろえて提出しなければなりません。）、合格祝賀会への参加、就職活動としての事務所訪問、研究室での後輩指導等、スケジュール調整をして、いろんな場所へ走りまわる日々が始まります。

同期の合格者が、一斉に手帳を購入して、持ち歩くようになったのを思い出します。

そして、司法修習生として採用決定通知が来ると同時に、修習先が決定します。わたしの実務修習先是那覇地方裁判所でした。全く希望を出していないにもかかわらず、人気があるという那覇に赴任することになり正直愕然としました。当時、新64期修習生は修習にあたっての費用が給費制から貸与制に移行するとされていて、お金もないのに、那覇で一人暮らしを始めて、母への仕送りもしなければならない、どうしよう、と途方にくれました。

しかし、時間は待ってくれません。11月頭には、修習のガイダンスと称して、自費で那覇に2泊3日の下見に呼び出されます。その際に沖縄で住む場所を見つけて、



引っ越しの準備を進めます。実務修習地に赴任する前に、少しでも就職に役立ちそうな情報を探して事務所訪問をし、合間に研修生、後輩の答案を見るという相変わらずバタバタした日々が過ぎて行き、那覇に旅立つ日がやってきました。

2 実務修習

(1) 修習初日

修習開始日の前日に貸与制への移行が1年延期され、私たちの修習は給費制ということになりました。

修習開始式の机の上には、大量の書類が積まれ、裁判所の総務課の方が大慌てで給与振込先、交通費の計算等の説明をしていたのを覚えてい

(2) 実務修習の概要

実務修習では、刑事裁判、弁護、民事裁判、検察と2カ月ごとに実務を経験していきます。

たった2カ月なので一つの事件を最初から最後まで見ることはできません。唯一、第1クルールの刑事裁判修習で扱った事件について、弁護修習先の指導担当弁護士が弁護人となっていたので、続けて見る事ができて、弁論要旨も起案できました。この事件の判決はさらに次のクルールの民事裁判修習中でした。この事件は被告人が控訴し、その結果を二回試験終了後に帰任の挨拶をしに那覇に戻った時に聞くことになりました。

実務修習では、裁判官、弁護士、検察官がそれぞれの立場で、できる限り修習生に便宜を図ってくださいます。ほとんど全ての場所、会合に修習生は同席することができますし、意見を求められることもあります。現在、弁護士として実務で行動するようになってあらためて、修習生は恵まれているし、修習時代の経験は大変貴重だったと感じています。裁判官や検察官が何を考えて行動しているのかを知っているから、弁護士としてスムーズに活動できることが多々あります。

(3) 弁護修習で知ったこと

実務修習で一番思い出深いのは、やはり弁護修習です。わたしの指導担当は沖縄合同法律事務所の加藤裕先生といい、沖縄の基地問題、環境問題等の大きな弁護団事件のほぼ全てに関わっている方です。単なる弁護修習ではない、さまざまな経験をする事ができました。

たとえば、住民が座り込みしている高江地区の現場へ助言をしに行く、公害調停委員として宮古島の海上へ現地調査に行く等々、今まで全く知らなかった沖縄の現実を教えていただきました。

また、沖縄北部の高江地区では、必要のないヘリパッド建設に反対して座り込みをしていた住民を国が通行妨害で訴えるという訴訟が行われています。このような訴訟をスラップ訴訟といい、住民運動をしている人々を被告にすることで、運動を弱体化させようとする意図のもと

に行われています。このような訴訟があることを弁護修習で初めて知りました。

(4) 沖縄の特徴

ア. 基地の存在

沖縄に行って感じることは、やはり基地の巨大さです。沖縄本島の中心部に巨大な基地があるため、道路、その他の人々の生活が基地の周りに追いやられているということを現実として感じます。

また、那覇市では騒音はそれほどありません。しかし、嘉手納や普天間の基地のそばでは、旅客機とは違った戦闘機の異常な騒音に驚きます。しかも、飛行機やヘリコプターは、訓練で飛ぶので、いつも同じ時間場所で運航するわけではありません。予測できない時間や場所で戦闘機の爆音にさらされるというストレスは尋常ではないということを知りました。

イ. 沖縄の自然環境について

また、沖縄ではヤンバル（北部の森）にイタジイという柔らかい木の森が広がっています。イタジイは柔らかく国の特別天然記念物のノグチゲラがこの木に営巣します。イタジイは柔らかいため、伐採してもチップにすることしかできず、伐採される必要がないように思えます。しかし、ヤンバルでは必要のない林道が網の目のように張り巡らされ、イタジイがところどころ皆伐され、はげ山になっている部分があります。これは、森林組合がイタジイを皆伐し、その皆伐を隠すために、成長の遅いイタジイではなく、成長の早い他の苗木を植栽するからです。植栽することで、補助金が支給されるのです。イタジイのチップ代だけでは、伐採しても利益は出ませんが、新たに成長の早い苗木を植樹することで県から補助金が出るのです。この補助金目当てで、イタジイの皆伐が横行していますが、イタジイ以外の木では、固くてノグチゲラは営巣することができず、このままでは貴重なノグチゲラの生態系を壊す危険があります。

さらに、泡瀬干潟では、不要な埋め立てが進

められ、干潟の豊かな生態系が危険にさらされています。この埋め立てについては住民訴訟が提起され、那覇地裁により違法な公金支出との判断が示されたにも関わらず、沖縄市は当初の計画を変更はしましたが、埋め立てを依然として継続しています。

ウ. 沖縄の抱える構造上の問題

沖縄は離島のため、必ず飛行機やフェリーといった輸送機関を使わなければ行くことができません。飛行機等の輸送機関の運賃は下げると言っても限界があります。そのため、沖縄の旅行パックの商品は、沖縄現地のホテルの宿泊料金を下げることになります。現地では、観光客に来てもらわなければ利益が出ませんから、ぎりぎりまでホテルの宿泊代金を下げます。結果として、沖縄のホテル業界はいつも火の車で、どんなリゾートホテルも開業2、3年後には、外国資本に買収されるなどしています。沖縄の人件費が異常に安いのもこのためです。

また、沖縄は男尊女卑の価値観が強く、DV被害、性犯罪被害が非常に多いこともその特徴の一つです。タクシーの運転手の方との会話や、居酒屋での店員の対応など、何気ない日常生活の中で、首をかしげるような事が多々あったのを覚えています。

このように、沖縄は素敵なおところですが、知れば知るほど、矛盾を抱えた切ない場所でもあります。

そうはいっても、わたしも修習の合間に、ダイビング、ビーチパーティー、ヤンバルハイキング等、自然を満喫できる環境のもと、充実した日々を送りました。修習地が決まったときには愕然としたと書きましたが、実際に住んでみれば楽しく充実した生活で、あっという間に8カ月が過ぎて行きました。

(5) 選択修習

選択修習期間には、自己開拓プログラムといって、自分で修習先を見つけ、許可を得ればそこで最長3週間修習することができます。もち

ろんその修習先は、法律に密接に関連する分野でなければなりません。わたしは、東日本大震災で被災した仙台で、POSSE という NPO に参加して、被災者支援にあたるという自己開拓プログラムを修習の内容としました。

東日本大震災が発生した平成23年3月11日に、わたしは、弁護士修習中で宮古島に現地調査に行っていました。テレビで恐ろしい津波の映像を見て、横浜の家族に電話するもつながらず、のどかな宮古島の光景のなかで、本州との距離を痛感させられました。

阪神大震災のとき、大学生だったわたしは、ボランティアに行こうと思いつながらも行けず後悔した経験があります。わたしは、阪神大震災は関東大震災のように、歴史に残る大惨事で、わたしが生きている間はもうこんな災害は起きないだろうと思っていました。しかし、阪神大震災からわずか16年後に、それを上回る大惨事が東北で発生してしまいました。わたしの家族が住む横浜でもいつ同じような災害が起こってもおかしくない、他人ごとではない、今できることをしなければ、という気持ちに駆られました。

そこで、自己開拓プログラムで被災地支援の実情を学ぼうと考え、被災地支援をしている NPO や社会福祉協議会等の受入先を探しました。その中で、東京でもともと若者の労働相談を行っている POSSE という NPO が仙台で被災者支援を行っていることを HP で知りました。いきなりでしたが、代表にメールをし、修習の受け入れをお願いしました。代表の方から、快く承諾していただき、沖縄弁護士会、司法研修所の許可も受け、9月からの3週間は仙台で仮設住宅をまわって被災者のニーズ聞き取りなどのボランティアをしました。

そのなかで、生活保護を受給していた女性が、義捐金を収入として認定され、生活保護を打ち切られたという事案に遭遇しました。被災地では、障害者、母子家庭等、社会的弱者が真っ先に困難な状況に陥っていました。あらためて、

法律を知ってそれを使う専門家として、今後何ができるかを考えさせられる良い経験をしました。

3 集合修習と二回試験

10月からは集合修習といって、埼玉県和光市の司法研修所で座学の修習です。10ヶ月間沖縄で過ごした後に、2ヶ月間勉強漬けの毎日がやってきました。毎日とても忙しく2回試験の対策をする日々です。わたしは司法研修所の寮に入らなかったため、通勤に片道2時間半かかり、身体もへとへととの状態でした。

集合修習中の成績はあまり芳しくなく、二回試験に落ちたらどうしよう、という不安の中で過ごす日々でした。

二回試験は、1科目7時間、起案枚数30枚から40枚書くという試験を5日間続けるという体力的にも過酷な試験です。修習生活の集大成ですが、落ちたら就職先にも迷惑がかかるし、司法試験とは異なり、ほとんどの修習生が合格する試験です。落ちることができない、というプレッシャーは司法試験とも異なるつらさがあります。

実際に試験が終わったときは、もう振り返りたくないと思ったので、すぐに沖縄旅行に旅立ち、その後仙台で再度ボランティアをして過ごしていました。

そのため、試験の結果は友人に見てもらいメールで連絡してもらおうという方法で知りました。仙台の仮設住宅でボランティア仲間と合格を喜び、お祝いをしてもらいました。

年末年始は、わが家で久しぶりに家族とゆっくり過ごしました。前年は沖縄で年越ししたことを思い返すと、本当に激動の1年だったと思ったことを思い出します。

第2 弁護士としての生活

1 事務所紹介

無事に二回試験に合格することができ、平成24年1月から藤沢にある湘南合同法律事務所

で弁護士として働き始めました。

湘南合同法律事務所は弁護士が私を含めて8名の比較的大所帯の事務所です。同期でもう一人女性の弁護士が入所したので、何でも相談することができ、楽しく仕事をしています。また、先輩の弁護士の方々もそれぞれ個性的で、事務所はいつも和気あいあいとしています。

初めてのことばかりで、何をやるにも時間がかかっていますが、いろいろな先輩弁護士と一緒に仕事ができ、充実した日々です。

DV被害者、性犯罪被害者の支援をしたくて弁護士になったのですが、DV被害者の離婚調停、性犯罪被害者の被害者援助代理人を研修で引受けることができ、やりたい仕事をできることを非常にうれしく思っています。

2 弁護士の一日

平日の昼間は、裁判期日が入っていれば、法廷に向かいます。藤沢から関内の横浜地方裁判所までは片道40分かかります。他にも、他事務所での打ち合わせ、横浜地検での記録の閲覧、警察署での接見等、外での用事が多いため、昼間は移動時間にかなり時間をとられます。また、事務所にいると電話がかかってくたり、法律相談が入ったり、昼間はなかなか落ち着いて仕事ができる状況ではありません。事務局が帰って、電話も鳴りやむ午後6時以降に、それぞれの弁護士が黙々と起案をするという状況です。

わたしも、土日のいずれか1日は必ず事務所に出て、起案するという日々になってきました。起案する仕事も、次から次へと増えてくるため、じっくり考えて納得いくまで何度も書き直して仕上げるということはできません。限られた時間の中で、どうやってペストを尽くして完成させるかということが試されているのだと思います。

3 新たな課題

個別の事件に取り組む以外に、弁護士になってから福島原発事故による被災者の損害賠償

請求の弁護団に加わりました。

原発の被災者は、被ばくしたことによる影響が今後どのようにして出てくるのかという不安におびえ、帰ることができるのかどうか先が全く見えない現状に疲弊しています。

弁護団に加わらないかという誘いをいただいたときに、今後解決までに何十年かかるか分からない、途方もない事件を引き受ける勇気がないと、いったんはお断りしました。

しかし、一度現地に行って実際に被災者のお話を伺うと、わたしでできることは少しでも始めなければ、という気持ちになりました。被災者の方は、原発事故によって、一瞬で自分たちの生活の全てを奪われてしまいました。どうしたらよいかわからずに途方にくれている方の話を聞くと、なんとかしなければいけない、弁護団に加入して、とにかくできるだけ現地に足を運ぼうと思うようになりました。

その後は、平均して月に1回ほど、いわき市、二本松市などに通っています。ゴールデンウィークには浪江町の一時立ち入りに同行させていただく機会があり、貴重な経験をしました。

福島県の弁護士の数ではとうてい対処しきれない被害者の数です。弁護団としても、どこまで損害が拡大するのか先の見えない事件ですが、たくさんの先輩弁護士と一緒に、東京電力、国

への請求を粘り強く続けていきたいと思っています。

第3 この2年を振り返って

とにかく毎日めまぐるしく、じっくり落ち着いて考える時間がとれません。ここまで久しぶりに合格してからの日々を振り返ってきましたが、あっという間でした。家とロースタールの研究室とを往復するだけの日々から、沖縄に赴任し、横浜に戻ってきて、藤沢、関内、相模原、小田原を飛び回る生活です。この2年間のわたしの移動距離は計算するとどうなるのだろう、という感じです。

ただ、先ほども書きましたが、弁護士になってやりたいと考えていた仕事を実際に手がけることができています。忙しくても充実した毎日です。

旧司法試験時代から、大勢の勉強仲間が法曹になることをあきらめているのを見てきました。私自身はいつまでたってもあきらめることができず、やっと試験に合格して今の生活をしています。そう考えると、わたしにできることは、目の前の仕事に真摯に取り組んでいくことしかないと思っています。

(新64期・湘南合同法律事務所)